

677

特241

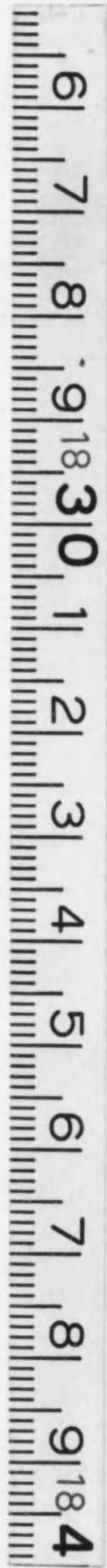
190

非常時局に際して

我等の進むべき道

天台宗寺門派教務部

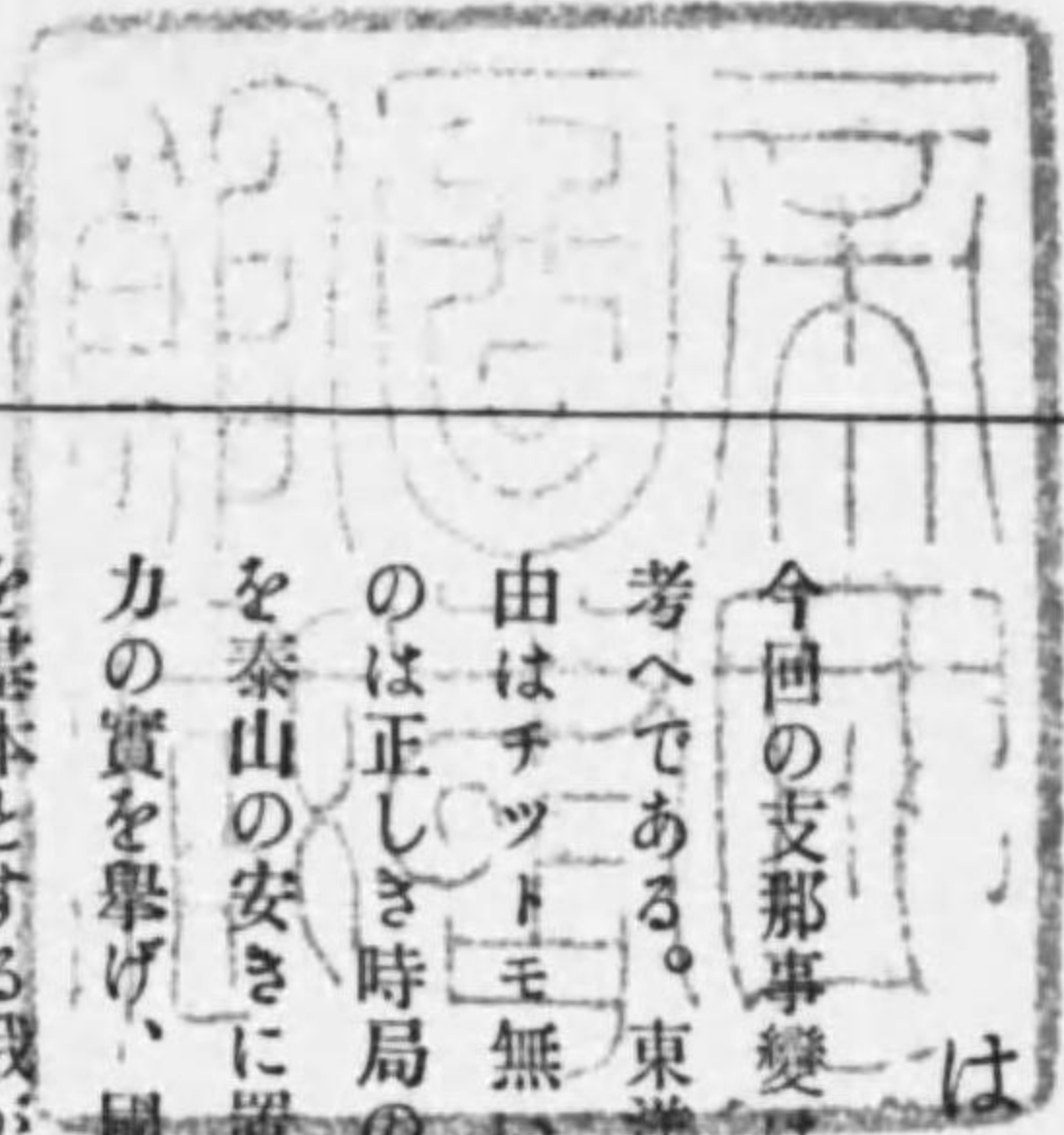
37
31



始



特24/
190



はしがき

今回の支那事變は、單に日支の間に起つた、事柄とのみ見るのは皮相の考へである。東洋に於けるスペインと、支那を想定する事に反對する理由はチツトモ無い。我國が古今未曾有の非常時に遭遇してゐると考へるのは正しき時局の認識の結果である。此難關を突破して萬古不滅の國體を泰山の安きに置くのは、一つに國民全體が、此時局を誤らず、一致協力の実を擧げ、國家總動員の不斷の實踐にある。皇基の振起と國家鎮護を基本とする我が佛教徒の使命や、實に大なるものあるを痛感せざるを得ない。

昭和十二年十一月二十日

天台宗寺門派教務部



目次

支那事變勃發の真相と其膺懲の目的.....

政權の救國抗日方策

○孫の三民主義と反蔣派.....

○反蔣派懐柔と容共政策.....

○藍衣社とCC團.....

支那に於けるコミンテルンの活動

○三國防共協定と、コミンテルン.....

○聯ソ容共政策と、コミンテルンの侵潤.....

○人民戦線派とコミンテルン.....

國家總動員下に於ける吾人の使命

第一、國民精神總動員の重要性

○近代戦と國家總動員.....

○ハリキル心.....

第二、産業經濟の統制

○獨逸は何故敗戦したか.....

○惠まれた日本國土の地勢.....

○歐洲大戦に於ける英國の食料統制.....

○我等の協力すべき實踐要項.....

第三、和協一致と日本精神

○和の本義.....

- 日本精神は大和の心なり.....
- 大和の精神と武士道.....
- 我國民性の特長.....
- 第四、國家觀念と智證大師の信仰
- 國體明徴は智證大師の根本精神.....
- 金色不動明王は日本精神の權化なり.....

非常時局に際して我等の進むべき道

支那事變勃發の眞相と其膺懲の目的

本事變勃發してより既に四ヶ月、今や北支は、平綏線を初め平漢線、津浦線の戦線に於いて皇軍の向ふ所敵なく、山東省に於ては既に大黄河の北岸に達し、濁流を挟んで意氣揚々として既に敵を制壓してゐる。又中部上海方面に於いては、今や遠く蘇洲の線に退却した敵兵は、戰意全くなく、も早、之をも放棄して、首都南京に最後のあがきを、見せんと決意せるものゝ如く、又政府の重要機關は既に遷都の準備を進めつゝある状態で寔に皇軍將兵の忠勇果敢な行動は、世界戦史空前の壯途を今や完成しつゝある。然し、吾人は何が故にかゝる聖戰の劍を抜かざるを得なくなつたか、其膺懲の目的は何處にあるかを、茲に再吟味して置く必要があらう。

昭和十二年七月七日夜半、我が支那駐屯軍豐臺駐屯部隊の一部が、北支蘆溝橋（北平西南方約三

里)の北方で演習中、突如支那兵より數十發の不法射撃を受けた事を忘れてはならない。これこそ、本事變の發端である。我皇軍は、其不法行爲に對して嚴重に抗議すると共に、飽く迄平和裡に、該事件の解決に努力接渉を重ねたが、終に支那側の頑迷無禮の徒を禦するに道なく、十一日には、帝國政府の重大聲明の發表となり、己むなく、内地より一部の兵力派遣となつた。然し我駐屯軍參謀部では、極力事件不擴大、現地解決の大方針の下に、隱忍自重、其圓滿解決に、最善の努力を、もつて、接渉したのであつたが、彼の欺瞞的行動は、益々、我皇軍を侮辱するのみで、果ては、北平城内外で我に暗討的反撃行動に出で、流石の軍部當局も、萬策全く盡き、終に、涙を吞んで、破邪顯正の爲に、東洋永遠の大平和建設の爲に、且つ又支那四億無辜の人民安寧の爲に、膺懲の劍は抜かれたのである。然し靜かに回顧すれば、本事變は、當夜の單なる不法射撃が其全貌の因ではなく、全く此れ支那側の數年來、着々と準備し計畫して來た、抗日、侮日、反日政策の總意が、偶々、かゝる機會を通して、爆發した迄で、所謂、事件直前の日支の關係が終始一觸即發の危機に瀕してゐた事を物語るものである。思へば、昭和五年の滿洲上海事變の結果、滿洲國の獨立、上海の停戰協定地區設定等、自國に取つて空前な不本意な結果に終止したので、其因果關係の當然な道理を冷靜

に判斷する餘裕なく、徒らに、我日本の侵略帝國主義の結果であると曲解し、事毎に、抗日排日の強硬方針を堅持して、軍事、政事、經濟の對象を茲に置いたのである。即ち蔣以下支那の要路者は、友邦我日本の眞意を解せず、支那統一の便宜的方法として、抗日排日の國民欺瞞政策を取つた、尙其上に、何時かは國家の破滅をも將來せずには置かない、赤露の魔手に、握手を求めて、對日國是を築かんと、之れ勤めたのである。蔣介石が、其國是の下に總ゆる角度から、いかに抗日の強化、支那の統一を畫策實行してゐたかは後に詳述するが故に、茲には省略したいが、其抗日政策の露骨振り、露國共產黨の援助、或は、英國の財的支援に依り、日と共に、惡化増長したのである。昨秋我平和經濟使節の訪支派遣も、南京抗日政策には、根本的に、何等の反響も呼び起さなかつた事は、今にして考へれば、當然の事である。

然り而うして、宋哲元が現地解決に一應我に承諾を與へ誠意を示したにも拘はらず、南京政府が之を拒絶し解決無效の宣言を發表し、飽く迄、我に挑戦して來た、其近因を考察すれば、自國軍備の過大を妄信した結果に他ならない、少くとも、北支及び、上海に於ける軍事施設の周到なる點に於ては、吾人の想像出來ない、完備さをもつてゐた事が、反つて今日、支那を誤らしめた、有力な

近因であらうと思ふ。本事變の終息が何時到來するかは、尙未だ其豫斷を許さないが、既に、蔣政權の運命は、累卵の域にあり、其前途は程遠からず。自決の運命を辿るであらう。而しながら、本事變に、我國力最高の犠牲を拂ひ全力を盡して國家總動員の下に敢行せる此嚴肅な膺懲の戦は、我國民使節が歐米各國で其國民全般に説述してゐる如く、決して徒らに、支那軍民を殺戮し或は國土の侵略を目的とした何物でもなく、我々は、全く誤れる支那軍政府の抗日意識の悪夢より覺醒せしめ、我國との和平提携に依り、東洋永遠の平和、日支兩民族の結合、融和を、確立し、王道樂土の平和郷を永久に樹立して、現在支那の亂麻の状態を、堯舜の往昔に彷彿せしめ、支那本然の姿に立ちかへらしめるにあり、これこそ我等に課せられた、今次事變の最高の目的であり、膺懲聖戰の理想である事を忘れてはならないと思ふ。

蔣政權の救國抗日方策

○孫の三民主義と反蔣派

孫文が大正元年一月一日、支那共和國の宣言を發してから、所謂三民主義(民族、民權、民生)を

以て、國民革命運動の完成、國家の統一に邁進し初めたものであるが、元來、三民主義は、民族、民權、民生の三義を一體とした運動で、初め、排日思想は必ずしも保有された譯でもなかつた、勿論、孫文も、親日家として、合理的に、理想主義の下に、支那の内治を完全にし外國に侵害された利權を取り返して行かうとしたもので、主戰的、排外思想を根本とはしなかつた、處が、世界の趨勢は其後非常な變動を來し、之に刺戟せられたのである。即ち露國に大革命が勃發した。隣國に起つた打倒帝國主義を高唱せる共產主義者の破壊的、イデオロギーは、支那、人心を動搖せしめた、即ち其前後より支那に漸浸し出した共產黨と、國民黨の合作が茲に支那政事家と一團となり、排日抗日運動の根幹を築き上げてしまつた。茲に特筆して置き度い事は、西南派の抑壓と全國統一の手段として蔣の取つた排日抗日政策である。即ち昭和四年、李崇仁等の西南派の武漢に於ける、反蔣の旗擧げ、或は、馮玉祥の反蔣宣言等に於て、偶々西南(廣西、廣東)方面地方の者こそ、寧ろ北、中支以上に、從來より抗日排日の思想が深いのに鑑み、蔣は之等を懷柔妥協する上に勢ひ抗日政策を標榜せざるを得なかつたのである。彼等が、反蔣の理由には、蔣介石が孫文の意志である三民主義實現の實行即ち、憲政實現期に國民大會の開催、憲法發布主權委讓等の諸要項の實施を行はず、

獨裁政事を施行し、彼の行動は民意を裏切り、孫文の革命意志に逆くと云ふ點にあつた。蒋介石は漸く昭和九年より、之が草案に着手し、昭和十一年五月に、其宣布を見た、然し其憲法の骨子は餘りに、國民黨の勝手な内容を盛つたが爲に蒋介石の獨裁權合法化に過ぎないとし、轟々として廣西派は之が反對の矢面に起ち、共產黨、人民戰線派と共同作戰に出たのである。

○反蔣派懐柔と容共政策

そこで彼は、之を慰撫するに抗日政策を利用し、自己の野望をカムフラージュして其銳鋒を避け、内紛をいましめ、國家急務の折柄、國內一致團結、極力對外強化の必要を説いた。茲に、日支間のみならず、東洋平和の爲に誠に、不朽の一大恨事と考へられるのは、容共政策を公然と、支那政府が取り入れた事である。即ち大正十三年廣東に於て開催の國民黨第一次全國代表大會の決議に依つて、聯露容共政策が採用され、翌年、孫文の北京に於ける客死後は、蒋介石が國民黨の實權者となり、千變萬化の波瀾曲折を此共產黨との間に惹起しつゝ、一種の腐れ縁の恰好で或は離れ、或は合流し、或時はこれと砲火を交へ、互に秘術を盡して、虚々實々、腹藝を演じ合ひ、此間には、

蒋介石の南京に於ける共產黨威壓のクーデター、唐生智の武漢に於けるクーデター等が行はれ、當時のソ聯支那顧問にして、現極東軍ソ聯司令官、ブリュヘル元帥が當時支那より追放されたのも此時分である。然しクーデターに依つて、銃殺、投獄等頻繁に行はれた共産分子の掃蕩も結局は、其細胞組織を巨大に、根強くしたに過ぎず、又他方蒋介石が、秘密容共政策に依つて抗日排日に利用し、國家統一に資した事は、尙更之に一大勢力の素地を與へてしまつたのである。西南派懐柔の爲に、李宗仁、白宗禧を、廣西第五路軍正副司令官に任命し、兩人をして、國家の急務たる舉國一致の抗日スローガンを支那諸國に通電せしめた事は、今春四月一日の事で世人の耳新らしい記憶として残つてゐる。

○藍衣社とCC團

尙この外に、秘密結社として國民黨及び政府の援助の下に活躍してゐる藍衣社並に、CC團がある。藍衣社は黃浦軍艦學校出身の軍人を中心とし蒋介石獨裁權確立及び抗日陰謀を目標とし孫以來の三民主義を放棄して、ファッショ主義の抗日徹底をスローガンとしてゐる。換言すれば、即ち

抗日テロの暗殺團とも云ふべきものである。

CC團は之に反し飽く迄三民主義の下に、且つ國民黨としての運動に終止し、指導者も陳秉夫等の文人を以て前者と異色あるが、抗日の點に於ては兩者にかはりが無い。之を要するに蔣介石は自己の抱懐する支那統一獨裁政治の野望の下に、ファシズムに依つて、抗日政策、三民主義に依る抗日運動、國民戦線に依る抗日運動を、第一陣にしき、中間妥協政策として、時に應じて容共秘密政策を取り、中國共產黨及び、紅軍に依る抗日、或は、人民戦線派の抗日、其他各種の共產團體の抗日の活動を第二陣とし、最後に、反蔣三民主義の廣東廣西派の抗日運動を巧みに、中央の、國家統一抗日救國の對外スローガンに誘導し、之を第三陣とし、中央蔣政權の三段構への、確古不拔の堅陣を築き上げ、猛然と我國に向つて強襲して來たのである。

此の間、米國ウィルソン大統領の民族自決宣言、或は、滿洲、上海事件（昭和五年）の勃發などは、支那全土抗日に、拍車を掛けた事は、申す迄もない。如上の抗日排日政策の結果、茲に、今次事變の起る迄數十回に渡つて其具體化された不祥事件は茲に列擧するの餘暇をもたないが、此等は日本人として、よく記憶に残つてゐるものとして省略する。

支那に於ける「コミンテルン」の活動

○三國防共協定とコミンテルン

日獨防共協定が昨年十一月廿五日ベルリンで締結せられて一年にまだならない今月六日、茲に地中海の友邦伊太利の参加を見、目出度く日・獨・伊三國の防共協定が、ローマで結成せられた事は、誠に現下の國際狀勢では、當然の結果とは云ひながら將來コミンテルンの横行を充分制壓するに効果すけ、引いては世界の平和確立に重大なる役割を演ずる事は疑ふ豫地がないであらふ。

茲に政府が昨年日獨防共協定を締結した目的と効果は今次の事變で追々其全貌が國民にはつきりと認識される様になつたが、元來潛行的な行き方をするこの種赤色運動は、つい一般の視界を狭くして了ひ、其認識力をそぎ勝ちである。然も今次事變の原因に尤も大きな役割を勤めてゐる、コミンテルン、少くとも、支那政局を中心とした、コミンテルンの起伏活躍を一瞥して見ると云ふ事は、防共協定に對する我々の認識を正しくする事が出來ると同時に支那の抗日排日の淵源を検討するに都合がよいと思ふ。

今夏より瀕々として行はれてゐる、ソ聯七將官の銃殺事件や數回に渡る全露内隱謀事件、殊にシベリヤ鐵道従業員の連座等の事柄は、ソ聯共產内部の不統一を曝露した。世人は之を眺めて、直ちに、コミンテルンの脆弱性を信する人もあらふが、之は危険な考へ方で、コミンテルンの活動は實際はそれに關せず、靜止する處なく、特に、支那滿洲に於ては其爪牙は營々として、絶へ間なく利き進められてゐる事を忘れてはならない。今回の事變に於ても、彼等の根強い陰謀の跡を顧みる時慢ろに、慄然たらざるを得ないのである。

○聯ソ容共政策と、コミンテルンの侵潤

露國共產革命黨が究極の理想とする世界赤化を目標に創設したコミンテルンは、今より十八年前即ち大正八年露國モスクバに於て成立したものである。即ち「第三インターナショナル」とも稱すべきもので、露國革命の推進原動力である。此「コミンテルン」は本部をモスクバに置き、各國共產黨を其支部として組織し、最近加盟支部は、六十五、此等支部の黨員は三百拾五萬、其中資本主義國黨員は、七拾五萬と云はれてゐる。其行動形態は、本部より各支部に指令し、其主義の宣傳を

第一陣とし、其目的遂行の爲には、世界秩序擴亂を、總ゆる角度から執拗な曝露戰術に迄及び或は犬猿の間柄である、「第二インターナショナル」とさへ、其目的達成の爲には、提携さへ厭はないと云ふ方法で、世界赤化のスローガンに猛進を續けてゐる。現在では支滿を越へて、我國にまで其銳鋒を向けてゐる、極めて恐るべき状態にある。支那は現在、貧困荒廢の農村多く、従つて近代資本主義の搾取形態の勃興があり、地方軍閥の封建的勢力の地方住民の壓迫、或は階級闘争意識の支那インテリ級への侵潤等赤化の要素を多分に抱含してゐる状態なので、共產黨勢力の擴大を急激にしたのも當然の結果と云へ様。抜け目なきソ聯では、コミンテルンの代表者として公然と、ヴォンチンスキーを支那に送り、また、くまに、中國共產黨を組織し、コミンテルンの支那支部として了つた。茲に支那全土の赤化運動は全面的となり、赤化勢力の扶植は、今や不拔の根株となつてゐる。そうした此扶植を助長させ、共產運動の飛躍を實現せしめたのは、支那中央政局が聯露容共の政策を取つたが爲である。前述した様に、大正十三年正月、孫文は「第一國民黨全體代表會議」の決議により、北方軍閥打倒の手段として、聯露容共の政策を取つた。其翌年孫文の死後兵馬の權と國民黨の實權を握つた、蔣介石は、ガロン（現極東司令官ブリユツヘル）、或はボロジンを、夫々支那の

軍事或は政事の最高顧問として、容共政策に深入りしたのである。然し、調子に乗り効を一舉に占めんとした共産黨は、蔣に逆鋒し、茲に共産黨の地盤は一頓座を來し、南京に於ける蔣のクーデターに其銳鋒を一時そがれて了つた。又一方、湖南地方の資本家に對しても、其當時、共産黨は勢に乗じて、赤色テロの暴舉を演じ土地財産の沒收を企て終に親露派の唐生智の怒りを湧發して、武漢に於いて彼のクーデターに、慘敗の憂き目を見たのである。即ち其當時、追放銃殺の共産黨員數萬に及び、南京のクーデターと相俟つて茲に、聯露容共政策は全く一時清算された觀があつた。然し既に潛行運動に根強い力を培養しつゝある事實を誰しも否定し得なかつたのである。

今茲に參考迄に、現下コミンテルンを指導し之との關係を持つと見られてゐる、在支各機關の代表的もの二三、舉出して見ると、次の如きものがある。

上海ソ聯邦居留民俱樂部 (上海總領事を會長としてゐる)

全ソ聯邦中史購買組合支部 (上海、漢口、天津等に設置され、表面は、ソ支貿易を目的としてゐる)。

天津インヴェストメント、コーポレーション (ソ聯人の銀行)

中ソ文化協會 (表面は支ソ兩國文化的結合を目的とし、南京、上海に本支を組織し、コミンテルン秘密工作發生の中心機關)

○人民戦線派と、コミンテルン

最後に吾人の注意を要するのは、コミンテルンが最近巧妙な活動を支那に初め、百パーセントの効果を擧げてゐる方策は、抗日、人民戦線派との提携である。之は昭和十年第七回、コミンテルン、モスクバ大會に於いて、反帝國主義、民族自決階級打破、國土獨立民衆解放、奴隸反對等の反ファシズム、反帝國国民戦線運動を創設し、之に依つて、コミンテルンの目的を擴充し共産黨及び共産軍の強化をはからん事を企てた。従つて反帝國闘争は、尤も手近な我日本を目標とし、支那を蠶食しつゝ日本の強壓を索制せんとする一石二鳥の手段を弄した譯である。此抗日人民戦線運動は、コミンテルンの支那に於ける重要任務の一つとなり。同年八月一日、中國共産黨大會に於いて、「抗日救國の爲、同胞に告ぐるの書」の宣言を發し、抗日人民戦線運動を正式に全滿支に呼びかけ、抗日救國政府の樹立並に、抗日聯合運動の組織に着手したのである。此人民戦線運動に盛られた、主義内

容は、支那の三民主義を多分に配分して、従来のコミンテルンの絶叫せる共產主義より来る階級闘争の革命理論や、土地革命論は支那民族に都合よく着色され修正されたものである。かゝる苦肉甘計取りまぜて、造りあげた、抗日人民戦線は、急速に活潑を呈し、インテリ級、即ち大學専門學生の各種抗日救國團體まで合流して其傘下に馳せしめ、終に抗日救國人民戦線聯合團の組織を見るに至つた。

昭和十一年十二月の西安事變後、一時共產黨にめざめた蔣介石は、三中全會に於て、赤化根絶決議案を通過せしめ、其方針を鮮明にしたが、部内の容共論者の切り崩し運動に其結束は亂れ、今次の事變直前には、紅軍（共產軍）と抗日共同戦線の密約を以つて一先づ落着いたが、現在では其密約は事變突發と同時に、實行に移され、昨今では蔣の依ソ政策の結果、共產黨要人は中央政府の樞要地位を占め、國民黨を制壓し中央の實權を把握して、蔣を今やロボットの地位に轉換せしめんとしてゐる。殊に、紅軍は改めて、中央正規軍に編入せられ、北支に、中支に、續々として第一線に送られ、山西、太原平野には既に數萬の大軍を活躍せしめてゐた事は、此稿を終へる時調度太原城占領の報と共產軍の遁走を追撃する皇軍の果敢な報道を手にして其皮肉な偶現に歡喜せざるを得な

いのである。亦將來コミンテルンの活動を撲滅せしめるには、三國防共協定が成立したとは云へ一刻も、我々は、油斷する事の出来ない、今後の我國民に課せられた、重荷の難業である事を、益々痛感する。

國家總動員下に於ける吾人の使命

第一、國民精神總動員の重要性

○近代戦と國家總動員

此頃の如く、近代戦では、其戦線は非常に擴大して、國家全體の、有形無形、全智全能を擧げての戦争となつて來た事に吾人は注意しなければならぬ。即ち廣義國防の叫ばれる所以も茲にあつて、第一線に於ける軍隊の奮闘と共に、他方、銃後に於いて、經濟統制に依つて、戦闘力の減退並に、國民生活の脅威を防止し、或は後方擾亂を目標とする思想戦に對抗して、國民戦意の衰退減殺を防ぎ、國家意識を強張り、國民精神を振起して戦禍の犠牲に堪えしめ、其究極の目的把握に全力

を注ぐ様になつた。所謂國家總動員は茲に必然的に要求されるのである。國家總動員は、其範圍は總ての國家機關の動員であるが、要するに、精神、人員、産業、金融經濟、交通、外交、宣傳等の動員が重なるものと見るべきであらふ。

抑々世の人事は、總て、平常の準備がなくては、非常の場合統制が取れない、まして、平常の態勢から、非常態勢下に國家の諸機關を統制せんとするには、常々の準備、訓練、努力等が、尤も大きな効果を將來する事は云ふ迄もないが、殊に精神總動員は常に國民思想の健全な指導が必要で、非常時局に當面して俄かに周章するが如き事では、所期の效果達成は到底覺束かない。國家總動員は此精神總動員が其根幹となり、之が中軸となつて行はれるもので、此精神總動員の實踐如何は諸動員成否の死命の鍵である。近衛首相が今回國民に呼びかけた第一聲に、

「吾々が國家に對する自覺に従ふ所、そこに國家總動員が強制を待たずして自らなるのである」と強張してゐられる様に、現下の時局に先づ此精神總動員こそ、國家舉つて其達成にお互に邁進せんとする所以である。

○ハリキル心

國民精神作興詔書には

「文化の紹復、國力の振興は皆國民の精神に待つをや」

と仰せられた。幾ら資源が豊富でも地味肥浴の國家でも、或は又如何に軍備が充實してゐても、夫だけでは、眞實の富國強兵文化の振興は望まれない。必らずや、其國民の精神の丹鍛、ハリキリ方に、左右せられる事を忘れては不可ない。支那の如き、資源に於て世界に冠たるものあり、國民天賦の智能に於ても、他に遜色を見ないにもかゝらず、何故、現在の様に、支離滅裂の國家形態となつてゐるかと云へば、これ全く、國民精神の缺陷、其脆弱弛緩性に歸すべきだと考へられる。

「ハリキル」

と云ふ事は、常時、非常時の區別なく總ての場合に處して、必要な事で、調度弓を滿々と引絞つたあの精氣の一杯に横溢した姿に我々の精神を絶へず置いてゐる事が必要である。一時、「ハリキル」が直ぐ疲勞を覺えたり、嫌惡状態にかはる「ハリキリ」方は、大國民の取るべき態度では勿論ない、

飽く迄堅忍持久の發奮力が絶えず之に伴はなければならない。

とる棹の心長くも漕ぎよせん

蘆間の小舟さわりありとも

と詠める古歌は尤もよく此「ハリキリ」方を表現したものだと思ふ。此心で吾人は將來長期に渡る膺懲聖戦に對して、精神の弛み懈怠を警戒しなければならぬ。前條述べた支那の、コミンテルンの活動も、この國民精神に一隙の、油断が生ずると、茲に驀進して來る。

我々が銃後の國民として、尤も警戒を要するのは、此後方攪亂を目的とした、思想強敵の侵入である事は今更申す迄もない。近衛首相は「國と國との戦は、武力のみならず、又經濟上の戦である」と云つてゐられるが、今次の事變には、前述した如く、恐るべき、コミンテルンが第一線に躍動してゐる、思想戦に巻き込まれてゐる點に、最大の關心を持つてゐるのである。

難攻不落を誇る天下の險陣に據つても、其守備する軍隊の内的精神力が沮喪してゐたり、其國民思想が攪亂されて統一されてゐなければ、調度あの栗のいがの様に、外廓の堅壘を待つ間もなく、内部より自炸崩壊して敗者の地位に長恨を飲まされる。古今東西幾多の戦史が之を立證して餘りあ

る事を、我々日本人としては、どうしても忘れては不可ない。これ全く、銃後の守りを忽やかにし其國民精神の缺陷と、萎縮に歸因してゐた事を同時に發見するのである。

明治天皇の御製にも

國をおもふ道に二つはなかりけり

戦のにはに立つとも立たぬも

と非常時國民の行く手を判然とお示しになつた事は、既に國民一同が今や其御主旨を深く奉體して居る所で殊更、申す必要もないが、日頃我が萬古不易の國體を中外に誇りつゝある信念を益々確乎不拔のものにして、後方攪亂者に其隙を與へないように一致團決せねばならない秋である。

第二、産業經濟の統制

○獨逸は何故敗戦したか

世界の人心を極度に震撼せしめた、かの歐洲大戰に、あれ丈頑張りながら終に、慘敗國の地位に甘んじなければならなくなつた、獨逸を吾人は永久に忘れては不可ない。獨逸自身も、まさか、か

る結果を夢想しなかつたであらう。恐らく普佛戦争當時のパリ―城下の誓を再現せうと思つてゐた事は、カイゼルが一般國民に、「落葉の季節には、此ベルリンに凱旋して諸民と杯を共にせん」と豪語した當時を想へば判然と想像出来る。然らば何がかゝる誤算を獨逸國民にもたらせたか、を考へる時、吾人は常に、我國情の有難さに感激するのである。獨逸は東に、西に、其戦線に於いて何時も絶對優勢な地位を占め、自國內には強敵を一步も踏み入れしめなかつた事は、其五年の長期戦闘に鑑みて、よことに、敬服せざるを得なかつた。事實殆んど世界の強國を網羅した聯合軍を敵にして、あれ迄の奮戦は、吾人の賞讃を禁じえないものがあつた。然るに、終に軍門に降つた。それは、軍隊の志氣沮喪でもなければ、軍備の缺陷でもなく、之れ全く獨逸の地勢國情がかゝる結果を將來せしめたのに他ならない。即ち、列強に挟まれ商工業國である獨逸は、尤も國家生存の上に必要な食料の自給自足國ではなかつた。各國聯合軍は、獨逸國家の唯一の弱點に着眼し茲に食料封鎖を斷行した。之か終に彼を屈服せしめた重大な原因となつたのである。今日の戦争は全く國家全般の國民と國民との戦争であつて、戦闘非戦闘員の區別は漸次其境界線を薄くして了つた事は前述した通りであるが、歐洲戦に於いて如實に其好例を示してゐるのである。實戦のみの勝利が、戦捷

國とはならない實例を此獨逸に見出したのである。

○恵まれた日本國土の地勢

而し幸ひにして我日本國は、徳川三百年の鎖國に、自給自足の訓練は、精神的にも物質的にも培はれ、特に、農業國として食料に關する限り、如何に世界中舉つて我本土を完封しても、微動たもしない試験済みの國柄であると云ふ一事は國民として寔に心強い極みである。然しながら、今次事變に、夥しい農村の壯弟が支那南北戦線に出征し、其人力不足を生じてゐる現下の情勢では、隣保協助の精神を以て銃後の國民が一致團決、生産力の擴充をはかり、産業報國に邁進せなければならぬ必要のある事は言をまたない。又之と同時に、たとひ、食料の自給自足國家とは云ひながら、不必要な攝取を謹しみ、所謂一粒の米と雖も、粗末にあつかふ事は、神佛の御心にそむくは勿論國家奉公の國民精神に悖る行爲であると云ふ信念に生きる事は、聽て非常時産業統制の根本觀念となる事を忘れてはならないと思ふ。

○歐洲大戰に於ける英國の食料統制

「今日の味方を思ふが明日の敵を考へない。」

とは英國の國是で、それ程、國家的には打算國の國民であると我々の考へてゐる英國人も、歐洲大戰に於ける舉國一致の國民精神の現はれは、日本人として教へられ、學ぶべき點は澤山あつた様である。流石は、地球の大半を自國の領土に染めてゐる大國の素養を充分に備へてゐた點は覆ふべくもなかつた。獨逸の、カイゼルが、戦端の頭初、落葉季節にベルリン凱旋を豪語したに反し、英國キツチナー元帥は、「此の戦争は少くとも十年の覺悟を持って」と國民に宣言して、第一に、自國の八割を海外植民地に仰いでゐる食料の統制節約に着手した事は有名な事實である。

之は某海軍將官で當時、地中海方面に共同監視の任務を帯びて、派遣せられてゐた艇長の話であるが、我海軍が地中海沿岸で共同服務中、印度航路の脅威から一時米の郵送が止み、友軍英國より食料の配給を受けてゐた。處が米を常食とする我が水兵には、パンは苦手であり、初め暫らくは、辛抱してゐたが、長く續くに從ひ、誰もが其量を減じ出したので、毎日其食ひ残りを海中に捨てざ

るを得なかつた、處が、パンは軽い爲に何時迄も海面に浮きつゝ地中海沿岸の諸所に停滯してゐたのを英國の將校が発見し、食料の節約統制に大童になつてゐる當時の事として、大問題化し、我が海軍に手厳しい小言を申し入れ、當時の我が幹部將校を手こずらせたといふ話がある。又同戦時中には、英國内の飲食店に於いては、食物の種類と其量を一人當り幾らと限定してゐた爲、我水兵の大食家は、二三軒の食堂を馳け歩いて漸く満腹したといふ挿話もある。

斯様に英國に於いては、其國情からして戦争中、食料品の節約統制に舉國一致の實を發揮したのである。我國に於いては、最悪の場合と雖も、かゝる準備は不必要であらうが他山の石として將來の參考に處したいと思ふ。

○我等の協力すべき實踐要項

今次の事變で戦線は北支中支南支に全面的に擴大されたので、従つて其戦費も、かの日清、日露役に比して格段の相違があり、或る専門家の見積つた處では、一日、約、一千万圓見當の出費と聞く。第一次、第二次戦費追加豫算の我が總額は貳拾數億圓として、ほゞ此豫算の範圍で其持續日數は、

想像がつく、尤もより以上に戦線が擴大すれば夫だけ、其行續日数は縮減され様、今や、上海は全く我が手に歸し、又第二防禦陣地として激戦を豫想されてゐた、蘇州の線も、之を放棄して南京を固守せんとする形勢にある現下の戦狀では、或は、豫想外に早く、事變の終局を告げるかも知れない。而し、現今の國際情勢は、單に、當事國間の争だと考へれば、大きな間違ひで、調度、スペイン内亂が其模範を垂れてゐる様に、複雑した國際關係が、其處に、亂麻の如く、織り込まれ、互に將來の豫測を許さない情勢下に置かれてゐる。

我々は一刻も心をゆるめる事は出来ない、亦今日迄の果敢な皇軍の戦捷に酔ふては不可ない。政府では本日、宮城に、大本營が設置せられたが、我々はこの事に對して充分の理解と覺悟を持たねばならない、さうして、最悪の場合を豫想して、不斷の忍耐力を以て時艱克服に努力すべきである。政府は、戦費豫算の充當には、先づ公債發行を施行し國民の之が協力消化を希望した。本年度に於ける其豫定額も參拾四億圓に及んでゐる状態である。又我國の本年九月末迄に於ける貿易の狀況は輸入額が非常に多額に上つた爲、輸出入差引約七億圓餘の輸入超過となり、前年同期に比し約五億三千萬圓の増加となつて居る。今後更に軍需關係品の輸入を必要とする場合には、我國際收支に相

當の影響を及ぼすべき事は明かである。尙今後の事變の推移、國際情勢の如何に依つては、此以上多額の戦費と多量の物質が必要となる事は豫め覺悟せねばならない。

然し如何なる大國家と雖も、戦時財政の見地から見て、かゝる程度の輸入超過や、國債發行のある事は當然で、我國の如く、今や其國富、一千百億圓と算定せられてゐる大國家に於ては、何等恐るゝに足らないのである。只だ茲に前言せる、英國人の世界大戰に於ける嚴重なる食料統制を斷行した如く我々は、又軍需品關係の材料の消費を節約し、國際收支の上から、外國輸入品の使用を敬遠して、國産品を持つて之に充當し、出來得る限り、廢品を利用して、資源の回收に役立て、金屬製品の使用を避けて其代用品で辛抱するといふ事に献身的に、留意する必要がある。消費の節約は、平常の時より心掛けねばならないが非常時體制下にあつては、尤も其影響は直ちに全般に反映する、去る十月大藏省及び商工省より發表の、吾人の消費節約の對象となる、物資を參考迄に左に掲げて見れば、

棉花、羊毛、鐵、白金、銅、眞鍮、鉛、亞鉛、錫、ニッケル、アンチモン、石炭、石油、ゴム、
木材、紙、皮革、麻

等である。右に掲げたものは、皆夫々、我國內のみの産出では、其需用に充當出来ないものである。而も尤も日常の國民生活或は、戦時の軍備材料に不可缺のもので、茲に我等國民としては、出来る丈の節約を必要とする所以である。此國民經濟戦に持久の覺悟を以てよく政民一致の効果を擧げる事が出来れば、聽て此れが本事變の最後の勝利を獲得する最大因となるのであらう事は、疑ふべくもない。

第三、和協一致と日本精神

○和の本義

去る九月四日帝國議會に於て親しく一般議員に賜つた勅語中に、

「朕は帝國臣民が今日の時局に鑑み忠誠公に奉じ和協心を一つにして、贊襄以て所期の目的を達成せんことを望む」


と仰せになり和協一致の國民の奮闘を先づ第一に御切望遊ばされてゐる。さうして其努力の結果所期の目的を遂行せん事を念願し給ふのである。誠に恐懼に堪へない畏こききわみとも申すべきで、

今次に於ける 陛下御宸慮の程も恐察するに餘りあり、茲にひたすら忠憤感涙の念禁じ得ないものがある。誠に此昭和の御代に生を受けた我々が萬邦協和の實を一日も早く顯現して、陛下の思召に奉答せねばならない、それが爲には我國民は上下一致軍民一團となり、一条の亂れも生じては不可ない些細の間隙をも造つては不可ない。和協は元來大日本帝國建國の初めより我國是の基礎であり其推進力である。語を寄す。抑々我々は先づ萬法の總てが和に依つて生じ、和に依つて活動し、和に依つて其永遠の生命を保つてゐる原理を自覺する必要がある、即ち陰陽和して、天地萬物を生じた本源の理を忘れては國家も社會も人生も、皆破壊分解せられ其命脈は、一日も保ち得ない點に想到するの必要ある事を。

聖德太子の十七ヶ條の憲法にも、

「和を以て貴しとなし、忤ふること無きを宗となす」

と國民の大本を示された事は今更云ふ迄もないが、我日本建國の精神は、實に神代このかた、和を治世の根本と遊ばされ、國民に垂れ給ふ教は皆これを中心とせられてゐるのである。一國の盛衰も一家の浮沈も一身の保徹も皆これの成否に依つて決するのである。説文の解釋に依れば、和は

禰の形であり、禰は神を祭る形で、は稻の穂である。即ち稻の穂を神に捧げ赤誠をこめて神を祝福する敬虔な姿である。此姿こそ我建國の精神で大和の眞髓は茲に歸するのである。言ひ換へれば神前に捧ぐる五穀は我等の魂の結晶である。此結晶を捧げて、神前に額づき無二の心を披瀝して神に宣誓する。神の心と我等の魂とは茲に堅く結ばれて一如の姿となる。此姿こそ和の本然の姿である。神の前に額づく總ての者は、茲に、神の心と一致結合して、即ち神の心を通じてお互の心は相融合する。其處に絶對の大和の姿が生ずる、佛教の所謂悲智圓滿の姿であり、佛、心、一如、自他和合の妙體でもある。孔子の中庸の論旨も其眞意は、此姿と彷彿する。それ故和は決して妥協の末に結ばれた不徹底のものではない。我等の私心を離れた、神の心に融合して初めて認められる姿である。無我の心境にして初めて和は成立するのである。だから千里を離れた者も神の心に融合して即座に和合されると同時に、幾ら近くに同居する骨肉の者でも、私心を挟み、我執に捉はれてしまへば、萬里を隔て、永久に其心は離反し、和合の實を結ぶ事は不可能となる。日本精神の本來の姿も、又所謂、大和魂も、此「和の姿」に外ならない。

○日本精神は大和の心なり

我國は萬世一系の天皇之を治し給ひ、皇孫降臨し給ふ後は、代々の陛下を天照大神の現つ御神として、下萬民は之に奉仕し、此萬邦無比の國體の許に現下の隆盛發展を期して來たのである。茲に此高宗を代々の現つ神として、赤誠を契ふ國民の熱情、此心が日本精神の根幹をなし大和魂の發顯となる。聖德太子が和を治世の根本とせられた以所も亦茲にある。佛教が聖德太子の御信仰に依り我日本國に一大飛躍の隆盛を來したのも、我大乘の教はこの大和の日本精神と異體同心のものであつたからである。此大和を離れて我が日本佛教が成立しないとすれば、又日本精神を離れて日本佛教の信仰は其骨柱を失ふと云ふ事になる。此點こそ佛教が我國民性に取り、他宗教に冠越して其地位を保つ根本の理由であらう。

○大和の心と武士道

今次事變の非常時帝國豫算審議の爲開かれた帝國議會の劈頭長くも賜つた勅語の中にも

「帝國と中華民國との提携協力に依り東亞の安定を確保し以て共榮の實を擧ぐるは是れ朕が夙夜
軫念措かざる所なり」

と仰せ給ふたのである。此勅語を拜した我々國民は今己むを得ずして支那膺懲の軍を東亞の異郷
に送つてはゐるが、其本旨は彼との平和提携を一日として其念頭より離れた事がないと云ふ事を判
然と中外に御宣示遊ばされた譯であり、又陛下の御心と共に我々國民が如何に和平を最高の理想と
する國民であるかを海外に示す御勅語と拜せられるのである。外國人の中には往々、我日本人を以
て好戰國呼ばはりをし、さつばつな人種と想像した時代もあつたが、之は史實に現はれた古來の我日
本固有の武士道を誤解した結果である。古來我が武士道は彼等の考へてゐる様なさつばつな事を好
み之を事とする道では決してなく、武は其字の通り、戈を止めしめる膺懲の意味で、即ち平和實現
の爲に刃をおさめしめる道を指して云つたものである。不動明王や妙見菩薩其他の諸佛が、利劍を
振りかざして居られる威容も、これ亦武士道と少しもかはらない。皆平和攪亂者膺懲のシンボルで
あり、窮極の理想は絶対の大平淨土具現に於かれてゐるのである。

四方の海皆はらからと思ふ世に

など波風の立ちさわぐらむ

この御製は日露戦役の際、明治天皇が御詠み遊ばされた我國民周知の御歌であるが、世界平和の
爲に當時如何に宸襟をなやまし給ふたかが、今更ながら恐察し得るのである。又

國の爲仇なす仇はくたくとも

いつくしむべき事な忘れそ

とも仰せられ、誠に廣く敵國の將兵民衆にさへ仁慈の有難き御言葉を賜ふたのである。此おほみ心
こそ國民に取りては、大和魂ともなり、武士道精神ともなる。又諸佛諸菩薩の大乗の精神と少しも
かはらないのである。

○我が國民性の特

かく觀じ來ると、我日本國及び日本人程、平和を愛し、之を貴び、之が爲には、如何なる國難を
も厭はない國民性は他に其比を見ないのであり、又其目的遂行の爲に勇往邁進するのが我古來傳統

の國是でもあると云ふ事を歴然と自覺せざるを得ないのである。かの熊澤蕃山も、

愛き事のなほ此上につもれかし

限りある身の方ためさん

と詠んで非常時國民の覺悟を此歌の心に躍如たらしめてゐる。さればこそ、東洋永遠の平和實現の達成の爲にかの日清の役となり、日露の交戦となり、今や又日支事變ともなつたのである。我々は此確固不拔の大國是の下には一致協力大和の神の精神を體得して、此艱難を克服せねばならない、かの一女性望東尼すら、

たが身にもありとは知らずまどふめり

神の形見の大和魂

と叫び我が女性の爲に萬丈の氣を吐いてゐるのである。日本精神は……大和魂は決して、男子のみが専有してゐるのではなく、又我日本の女性にも、男子と同様に、此精神の横溢してゐる事を此歌に依つて強調したのは誠に、同慶に堪へない次第である。而も此精神、この魂は大和の神の心より發し、これが抱懷の目的こそ我日本帝國建元以來の最大の使命であり、國是であると觀する時、

今次事變の窮極の目標が東洋永遠の平和、即ち萬邦協和の、我建國の大使命に相一致する神の聖戰であり、天理の下す膺懲の劍である事を彌々深く自認するのである。

第四、國家觀念と智證大師の信仰

○國體明徴は智證大師の根本精神

今次支那事變を、トリナとして豫てから醗酵されて居た國際間のあらゆる難關は將來深刻に我國に覆ひかぶさつて來るであらうが、我國民は何處迄も大陸的國民の胸度をもつて、あはてず動搖せず、長期戰の覺悟をもつて最も慎重であらねばならぬことは皆周知の事實で、軍民一致國家總動員の實行期に當面してゐるが、其實踐に當り、之を自然的に活潑に働かす丈の根本的なものがなければならぬと思惟する。それは申す迄もなく、我國體觀念の明徴にあることは自明の理であるが、それが絶對的な深遠無窮な處に基礎を持つものでなくてはならぬのである。それは要するに、宗教的信念であつて、之が吾人の精神内に恒に確固不拔に基礎付けられて居なければ本當ではないのである。

此宗教的信念に就て、先づ第一に吾人の念頭に想起せられることは、我祖智證大師の御信仰である。大師の御言の中に、間々

「思國如宅」とか、「丁寧鎮國」とか「擁護國家」とか云ふ様な、御言があるのを思つて、吾人は大師御一生永劫の目的が畢竟そこに在ると信するものである。大師は臨終に及んで

「他に佛土を求めらるゝことなく、我滅後は像を造り骨を其中に納めて唐院に安置せよ、我は佛法を護り皇化を翺たぎくるものである」

と告げられ、此現實の國土即此足下を中心に佛國土として、その建設に永劫の努力を續けて行かう。而してその法の行はれる處が、我存在であると云はれて居るが、此の如く日本國をもつて佛國土と定め、鎮護國家を信念の根本にして力強い徹底した信仰に生きて居られたことは他の大師方には從來餘りないと思ふのである。

○金色不動明王は日本精神の權化なり

大師は二十五歳にして金色不動明王の靈感を得られ、それが又御一生の信仰中堅本尊となつて居

るのであるが、御本尊のあの宇宙の奥底までも凝視して居られるかのやうなあの透徹したまなざし、大空を足下に踏へてそれと冥一し、シツカリといかなることがあつても此絶對的な精神には微動も感じないぞと云ふ、あの御足のふまへかた、……人類共存の大道に背く利己的な行動を取る惡魔を斷ち切る大智の劍、……すべてを攝護して各その處を得せしむる大愛の索、……かゝる聖業の奉仕者として斷へざる奴僕の活動に終始せられるのが不動明王の御姿である。此日本を中心として全世界を淨化し、現世を佛國土として莊嚴し衆生を如來の生命として成就しやうと云ふ力強い躍動精神、之を生命として永劫無限に生きて行かふと云ふのが大師の御信仰である。之れ取も直さず徹底した日本精神の正體でなくて何であらう。

何日までも生死の海の渡し守

有爲の浪路のあらん限りは

と云ふ菩薩の誓ひこそ大師の御信仰であり、それが中心となつてこそ國體觀念が本當に躍動して來るのではあるまいか。此中心のない人程危いものはない、淋しいものはない、慘めなものはない。信仰なき國家は滅亡である、信仰なき家庭は闇黒である、信仰なき社會は鬭争である、信仰なき人

生は死である。此大師の御信仰こそ、亦我國民生活の中心信仰であらねばならぬと確信するものである。

現下の日本は國際的に如何なる立場にあるか、世界列強の非理なる壓迫をハネ返して太平洋時代の盟主となり、世界を指導すべき運命を擔ふものは何れの國であらう。我國民は全體的に日出るの國の我日本は世界の中心となつて、よくそれを正義に依つて廻轉せしめ得る聖業を今現になしつゝあると云ふ自信を持つべきでないか。光は東方より來ると云ふ言は曾て世界人のあこがれの言葉ではなかつたか。今次事變こそ、その第一楔機となつたものと吾人は信じたい。

『路遠くして馬の力を知る』

とは古人の云はれた名言であるが、我國民は宜しく此試練に堪ゆる丈の覺悟を持つべきである。之れは何も世界侵略を意味するものではない、全人類はその足下を確實に踏へ乍ら世界到る處平和にその生命共存の保證を得るのが我日本の願求である。決して國土の侵略ではない、その國土の開放である。『同人和合海』、之れが我日本の持つ結局の大目標である。而して此日本の願求が自ら我智證大師の御信仰と一致して居るのは實に不可思議ではないか。今次日本の聖戦には或一定の限度があ

るが、我々國民は精神的に深き信仰に導かれて永久の奉仕者であらねばならぬのである。

智證大師には靈骸として頂骨隆起の奇相を御持ちになつて居たが、大師在唐の際天台山の元璋和尚や台州刺史端公などから親切に、あなたは靈骸がある、此土地の人は迷信から靈骸ある人を私かに殺して其頭體を持つて福を求め利を致す資たすひとするから用心なさいと固く誠め注意をされたのであるが、大師は之れに答へて

『若し宿業あらば防護しても及ばぬことである、若し宿業がなかつたなら彼として我を如何ともすることは出来ませぬ』

と云はれて一向恐れられなかつたと云ふが、今亦吾人が此時局に處する上に於て、又如何なる困難に遭遇しても、平常崇高な信念の修養から心に餘裕を持ち落付を持ち得ることが至極肝要であることを忘れてはならない。

昭和十二年十二月一日印刷
昭和十二年十二月五日發行

(非賣品)

天津市別所天台宗寺門派宗務所内

編輯者

中西猷

淳

印刷者

京都市岩上通五條上ル

伊藤一郎

郎

印刷所

京都市岩上通五條上ル

一誠堂印刷所

所

發行所

天台宗寺門派教務部

終

